

グッドプラクティショナー 紹介

推薦文

高山京子さんを
グッドプラクティショナーに推薦する理由

高山京子さんは、ミクロからマクロまでカバーする「まさにソーシャルワーカー」である。もう16年、高山さんの実践をそばで見聞きしてきたが、所属と業務はちがえど根幹は変わらず、バリバリ前進し、道を作り続けている。「当事者の『ために』」ではなく、当事者と『共に』を進める高山さんのソーシャルワークは、独創的、かつ革新的である。特に精神保健福祉領域では、疾病と障害の共存、根強いステイグマ、医療偏重の歴史などから、エンパワメントが最も難しい領域とされている。その中で、常に当事者を中心に、当事者の力を信じ、

当事者と共に、次の10年、20年を見据えた事業を推進しておられる。今、その実践は、社会福祉に留まらず、文字通り「人と環境との相互作用」を包括的にとらえ、人と自然を相手に、また人と自然とつながりながら展開されている。驚くほど自然の摂理は、私たちソーシャルワーカーが目指す「多様性を包摂する共生」であることを学びつつ、これからも制度や慣習の枠にとらわれず、今必要とされているものを創りつづけていかれることを楽しみにしている。

(推薦者：日本福祉大学教授 大谷京子)

〈グッドプラクティショナーについて〉

1 背景と目的

- ・よりよい実践を発掘・評価し、広く伝えることにより、よりよい実践が拡大することを目指す。
- ・よりよい実践を行っているソーシャルワーカーの仕事ぶりを紹介することによって、よりよい実践とは何か、よりよい実践のためには何が必要か、などについて読者に考えていただく契機を提供する。
- ・これにより、ソーシャルワーク学会として、理論の発展だけでなく実践の向上を、また、理論と実践の往復運動の促進を目指す。

2 方法

- ・推薦者から候補者名をあげていただき、その推薦理由(200~400字程度)を書いていただく。合わせて、候補者に執筆の承諾をとっていただく。
- ・候補者は学会員以外でも可能。執筆内容は「実践内容」。
- ・承諾を得られた候補者には、編集委員会から「私の実践：ー」といったタイトルで、実践内容を紹介していただくように依頼する(3,200字程度)。

私の実践

持続可能で多様性を享受する ソーシャルワークとは？

ー「びすた〜り」の立ち上げとその実践の考察からー

高山京子 (NPO 法人びすた〜り)

1. はじめに

自ら NPO 法人を立ち上げて 8 年が経とうとしている。はじめの 2 年間はまさに「屋根のないところ」での実践であった。今も法人の活動理念の中軸を成す、無施肥（有機、化学肥料のいずれかも使用しない）無農薬無除草剤栽培である「自然栽培」の実践地、10 年近く耕作放棄地だった八田（やつだ）3,000 平米超えの借地が活動キックオフの場所となっている。当時この地は地域の景観を損ね、住民からは「マムシ谷」と言われるほど人が一切立ち入ることのない、本当にマムシだらけの土地だった。そこを 2 頭のヤギと法人の代表理事を務めるパートナーと一緒に開墾し、自給自足を目指す小さな畑をいくつも作り出した。

30 余年にわたりどうであれソーシャルワーカーとして生きてきた、と自負する私がこの取り組みに至った経緯と今思うこと、それらを概観することを通して、持続可能で多様性を享受するソーシャルワーク実践とは何かを一考してみた。

2. 「びすた〜り」とは

当法人は、ネパールの言葉で「ゆっくり」を表す「びすた〜り」という名を冠としている。パー

トナーが若い頃に重いカメラ機材を背負って自然豊かなヒマラヤの環境の写真撮影に挑もうとした時、その道の途中途中で現地のシェルパ（山岳ガイド）から声をかけられた言葉からとったものだ。足早に山道を登っていくパートナーに、シェルパが「ビスターリ、ビスターリ」とすれ違いざまに声をかけた。つまり彼らは「ゆっくり、ゆっくり」「急いで行くと、高山病になるぞ」と言いたかったわけだ。その忠告通り、彼は頭痛と息苦しさに見舞われ、敢えなく撮影も断念せざるをえなくなった苦い経験をする。私はこの逸話をかなり後に知ることになるが、これはまるで現代社会を生きる多くの人が体験している様（さま）を示唆したようでもあり、無視することのできない言葉の一つになった。

何かと気ぜわしい、生き急ぐことを強いられているような現代社会の中で、もともと生きづらさを抱えていたり、それが遠因となり、精神疾患を経て「精神障害者」と言われるようになった人たちと、私は縁あって 30 余年付き合ってきた。その人たちと共に生きることを選択し、どうせならゆっくり生きていこう、現代社会を席卷する速度とは異なる速度で生きていこう、そのような想いを込めて法人名に掲げた。

法人の運営形態を「特定非営利活動法人」としたのは、それに燦然と輝く希望があったわけではない。ただ、この法人を立ち上げるときに、長らく自分がソーシャルワーク実践で出会ってきた精

神障害のある人を中心に据えること、その人たちのことを応援する人を少しでも増やせたら、ぐらゐのふんわりした考えだった。

3. 邪なソーシャルワーカーへの道のり

私のソーシャルワーカーとしての人生は、まさに「主体のない」歩み出しだった。福祉系大学を卒業後企業に就職したものの、自身の仕事環境への過剰適応傾向に私自身が危機感を抱いた。企業で福祉実践ができることを夢見て一般企業に入社するものの、入社10ヶ月には自己の破綻を直感的に認識した。結局1年で「後を決めずに」退職し、大学時代の親友が勤務する団体で医療ソーシャルワーカー（以下、「MSW」）を務める大学の先輩を紹介してもらい、都合2年、先輩の助言に忠実に従い、あちらこちらの医療機関で「潜りのMSW実習」をさせてもらいながら、先輩から紹介された障害者施設での夜勤のアルバイトなどで生計を維持した。ここまでくると、私はMSWになって成し遂げたい何かを熟考することはなくなり、結局、先輩の導きで精神科ソーシャルワーカー、つまりPSWになる。一瞬MSWでないので躊躇したが、先輩からの「MもPも関係ない、どっちもソーシャルワーカーだ」の冗談のような言葉に背中を押された格好だ。ここから足掛け32年、精神保健福祉の業界に身を投じることになる。ただ、この邪なソーシャルワーカーへの道のりは、順調に私を実践の行き詰まりへと導いた。ソーシャルワーク実践に関する圧倒的な知識・技術のなさが露呈し、瞬く間にコンプレックスの塊と化す。そしてソーシャルワーク・アプローチ、テクニックのあらゆるに傾倒し、現場実践7年で破綻、社会福祉の学び直しを目的に32歳で大学院に進学することになった。

ところが、大学院時代は研究者に向かない自分のセンスのなさに直面するだけで、やはり生きる場所は「現場」しかないと思いついていた頃、偶然にもその機会に遭遇する。精神障害者社会復帰施設の整備事業を、新規社会福祉法人の設立と併

せて開始する、というプロジェクトだ。ここから今に至るまで、建物の整備事業（新築・改築含む）3件をはじめとするあらゆる「ソーシャルワーク」に従事してきた。ある意味、稀有な経験をさせてもらった。その活動を詳解することも時に必要であるが、すでに紙幅を相当費やしているため、持続可能で多様性を享受するソーシャルワーク実践とは何かを考える端緒となった「自然栽培」との出会いについて触れる。

4. 誰一人として取り残さない ～持続可能で多様性を認める世界との出会い～

「山の木々に肥料を与えた人はいますか？なのに、山の木々はあんなにきらきらと輝いていますね」。これは「自然栽培」の理念や栽培技術を確立させた、「奇跡のりんご」の登場人物、木村秋則氏の言葉だが、この言葉が私の自然栽培への関心への入り口になった。関心を持ったらすぐ実践する、が私のスタンス。8年前に耕作放棄地だった今の土地に出会い、2頭の仔ヤギ（今はすっかり頑固なおばちゃんヤギだが）を引き連れ、パートナーと一緒に開墾を始めた。人間一人がすっぽりと埋まるほどの草が藪の如く重なり、土地の形状すら把握できないような有様だった。前述の通り地域の景観を大いに損ねている土地で、その面積も尋常ではない広さがあった。農業機械もなく、人材もない零細法人にとって、まさに手に余るフィールドだ。しかし、何せ放置状態が十年余の土地とあって、幸いなことに農薬肥料成分が全くない自然栽培には最適な土地であった。そこで取り組み始めたことは単純だ。肥料も農薬も一切使用しない、そして除草剤はもとより、「雑草」と言われる存在を否定せず、根っこごと草を抜き取らない、まさに根絶させない栽培の仕方だ。なので、我が畑では栽培作物が常に「雑草」の中に埋もれ、畑の様子を絵に描くと、画用紙の全面が緑色になる、という面白い現象が生じる。この「自然栽培」のコツは観察と栽培作物へのほんの少しの手伝い、と言える。このコツについてはい

くからでも語ることができる奥深さがあるが、一言でまとめると観察が全て、と言及できるほど、この栽培法の中軸となる。観察をするからこそ、何が作物から求められ、何をほんの少しだけ手助けしたら良いのか、がわかってくる。そして、観察をするからこそ、栽培作物と雑草の関係や、相互がバランスを取り合い、共存しようとする様が見えてくるのである。私たち「農者」は、その求めを的確に理解し、環境で起きていることを邪魔しない実践をする存在であることが肝要である。ひたすら観察を続けていると、そこに生えてくる雑草でも毎年様相が違うことがわかる。すると、そこに植えるべき栽培作物の種や苗を工夫する必要がわかる。生えている雑草や栽培作物の生長具合で土壌の質を勘察し、そこに必要な取り組みを模索していく。こうしてようやく栽培作物を収穫すると、それはまさに自然の恩恵に預かる、という言葉がピッタリくる理由がわかる。それでも自然は残酷で強烈である。決して他の（種の）存在を否定し根絶することこそないが、時に自分の種にこだわり、猛烈な優勢を主張もする。しかしその翌年には、ころっと畑の様相が変わることも少なくなく、土壌の中、という見えない世界での見事なやりとりが成立していることに驚かされる。つまり、不思議な調和には歴とした科学的な根拠がある、ということである。私はこれがソーシャルワークの実践に符合することに気づいた。

我が国における私たちのソーシャルワーク活動は、今やあらゆる法に規定され、極端に矮小化されてしまった。ともすると福祉サービスにフィッティングさせることが「支援」だとか、ケアマネジメントプロセスを（まるで経たかのように）辿ることを通してサービスの支給決定を受けることが支援の主流になっている中で、ソーシャルワークはその価値をどんどん潜めているように見える。改正社会福祉法の中でも、地域共生社会やSDGsの実現を問われている。ともすると「誰一人として取り残さない」の言葉だけが一人歩きしかねない雰囲気違和を感じるが、それは自分たちの自然栽培の畑を自己のバランスの源として実感するからこそ生じるものではないか、とさえ思う。自然をお手本にすると、自分と異なる存在を認め、共に生きることは壮絶だと知る。だが、決して隣人を排することなくともに生き合うことに、これまた真摯に取り組む。葛藤や困難を排除するのではなく、その不確実性に耐え、ただ傍に居て何もできない、とひたすら無力を実感する、そんな積み重ねこそが必要であり、むしろそこに向き合う力が重要ではないか。答えを出さず常に問い続けることこそ、今を生きる、に求められている姿ではないかと実感する。そうした時、ソーシャルワーカーである私は観察眼を手がかりとした、社会改革のチャンスを狙い静かに地道に活動することを求められていると実感する。